

アル＝アハリーとザマーレク

—閉塞するエジプト社会とアフリカ・チャンピオンズリーグ—

安 田 慎*

「エジプト社会を知る一番いい方法は何ですか?」と聞かれたら、間違いなく自分はこう答える。それは「エジプトのサッカー・ファンになる」ことである。

まずエジプトに来て驚かされるのはエジプト人のサッカーに対する情熱だ。アラブ諸国に一般的にいえることだが、とにかく彼らはサッカーを観るのが大好きである。いや、むしろ彼らはサッカーに狂っているのだ。子どもたちが好きなのは世界どこでも見慣れた光景だが、エジプトはそのような和やかな光景で終わるようなやわなものではない。新聞の一面には毎日選手たちの写真が踊り、街中ではそこら中にクラブの旗が掲げられ、ユニフォームを着た人びとが行き交う。試合の日になると、マクハー（アラブ式の喫茶店）や街頭テレビ、人の家の大型テレビの前に年齢など関係なく人だかりができ、仕事を放り出して試合に釘付けになってしまう。こうなったら試合が終わるまで彼らは仕事などしないでテレビの前から離れない。さらに、ただでさえ喜怒哀楽の激しいエジプト人だが、この時はもはや手をつけられなくなるのだ。

このように国民の間で絶大な人気を誇るエジプトのサッカーのはじまりは、20世紀初

めのイギリス統治時代にまでさかのぼる。欧米人によって設立されたスポーツクラブを皮切りに、エジプト国内に数多くのクラブが設立され、サッカーは普及していった。1921年にはサッカー協会が設立され、1948年からは国内リーグが開催されるようになり、国民的スポーツとしての地位を徐々に確立していく。しかしながら、エジプトのサッカーは1952年のエジプト革命時や第三次・第四次中東戦争の時代、80年代末の政治的混乱の時代にリーグの中断・中止という憂き目にあっている。政治情勢に翻弄されてきた歴史がそこには確かにある。だが、そうした混乱のなかでも人びとは変わらずサッカーを愛し続けてきた。このように世代や性別を問



写真1 街頭でのサッカーの観戦
街中では試合の日にこのような光景がみられる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

わずに愛し続けられているエジプトのサッカーのなかでも、絶大な人気を誇っているのがアル＝アハリーとザマーレクというカイロに拠点を置く2つのチームである。

アル＝アハリーは1907年に創立されたアフリカでも類をみないほど長い歴史をもつ名門チームだ。設立当時、高まる反英運動やナショナリズムを背景に、エジプト人のためのスポーツクラブを設立しようという機運が高まっていた。それに応える形でエジプトのエリートたちが各地から資金を集め、エジプト人の学生のためのクラブを設立した。彼らの思いを象徴するように、チーム名は「アル＝アハリー（国民）」、チームカラーは当時のエジプトの国旗の色であった赤色が採用された。このチームに、人びとはエジプトの連帯と希望を託したといえるかもしれない。チームの輝かしい歴史を象徴するかのように、過去さまざまなタイトルを総なめにしてきた。リーグ優勝30回以上は国内で他の追随を許さない輝かしき歴史である。その他にも、国外のタイトルも数多く獲得してきた。こうした圧倒的な強さを反映してか、国民の半数がアル＝アハリーのファンであるといわれているほどの人気の高さを誇っている。

一方ザマーレクもその歴史は古く、創設は1911年にまでさかのぼる。こちらもその歴史の長さを象徴するように、アル＝アハリーにつぐリーグ優勝10回以上、国外でも数々のタイトルを獲得してきている。近年ではアル＝アハリーに遅れを取っている感があるが、それでもエジプトを代表する強豪であることには変わりなく、カイロを中心に根強い

人気を保っている。

リーグ設立以降、常にこの2つのチームがエジプトのサッカーを牽引し、エジプト・サッカーの歴史とともに数多くの名勝負を繰り広げてきた。この2つのチームの直接対決は今でも国中が注目し、盛り上がるのだ。

このカイロの2つの強豪を応援するエジプト人の熱狂ぶりは、傍からみていると圧倒されるばかりである。サッカーの話題になると必ず彼らが口にするのは、「エンタ アハラウィー アウ ザマルカーウィー？（お前はアル＝アハリーのファンか？それとも、ザマーレクのファンか？）」。そして同じファン同士だと意気投合し、違うファンだと容赦ないブーイングを浴びせてくる。教養ある大人たちでもひとたびサッカーの話題になるといつもの紳士的な態度はどこへやら、子どものように自分のチームを讃えて、相手チームをけなし始める。また、ユニフォームやグッズを身につけていると、老若男女を問わずにエジプト人の方からふらりと寄ってきて、同じファン同士意気投合するのだ。さらに、アル＝アハリーのファンが経営する店でアル＝アハリーのファンだと言ったら、「アル＝アハリーのファンならもっと値段をまけてやる」と言って大幅にまけてくれることなどはよくあること。逆にザマーレクのファンの前でアル＝アハリーのファンだと言うと「お前はアル＝アハリーのファンだが俺はザマーレクのファンだ。お前には一銭もまけてやるものか！」と冷たくあしらわれる。もちろん、逆も起こる。たかがスポーツでそこまでしな

くても、と思う部分もあるが、彼らにとってはそれが人生のなかで重要なことなのだ。

彼らが熱狂する背景には、エジプト特有の「複雑さ」が横たわる。民族的にはアラブ人がほとんどを占めるエジプトだが、ヌビア人や少数の民族も存在する。宗教的にも、ムスリムが9割近くを占めるが、1割近いコプト教徒も存在する。さらに、1970年代より押し進められてきた自由主義経済は、エジプト国内の貧富の差を拡大させてきた。大変裕福な暮らしを送る富裕層がいる一方、日々の生活にも困る人びとが併存している社会には、時に愕然とする。こうした民族・宗教・階層による違いが、エジプト社会の分裂と軋轢という問題をつねに引き起こしてきた。そのうえ好転しない経済状況や一向に減らない失業率がこの分裂に拍車をかけ、社会全体に暗い影を落とす。特に高等教育を受けても職に就けない若年層の増加が、社会の活力を失わせている。さらに、政治や社会に対する不満をなかなか表明できない社会のなかで、人びとの間では積りゆく不満と、閉塞感だけが拡大していく。突発的に起こる暴動やテロは、そのようなエジプト社会の閉塞感を象徴しているかのようである。

そうした分裂と閉塞感が漂う社会のなかで、「エジプト」という連帯を演出してきたのが、サッカーであろう。つまり人びとにとっての「エジプト」は、国家や出自、階層のなかに見出せるものではなく、サッカーリーグのなかに見出せるという皮肉めいた現実が横たわっているといえるだろう。そのなかでも、圧倒的な強さを誇ってエジプト・

サッカーを牽引してきたアル＝アハリーとザマーレクという存在は、人びとに連帯をもたらすだけでなく、閉塞に満ちた現実の生活とは違う、輝かしきエジプトを象徴する夢と希望を与え続ける存在であったといえよう。それだけアル＝アハリーとザマーレクはエジプト人の生活とは切っても切れない関係なのだ。とにかく、アル＝アハリーとザマーレクは現代のエジプトの社会とともに歩んできた。そして彼らは因縁の仲であり、同時に良きライバルでもあり続けている。

この2チームがそろって出場した2008年のアフリカ・チャンピオンズリーグはエジプト中の注目の的となった。残念ながらザマーレクは予選リーグで敗退してしましたが、アル＝アハリーは予選リーグを突破し、決勝にまで駒を進めていた。アル＝アハリーの快進撃に、ザマーレク・ファンは「アル＝アハリーなんてさっさと負けてくたばっちゃまえ！」と恨みごとを言う毎日であった。

この決勝に勝てばアフリカ最強の称号を得るだけでなく、クラブワールドカップにもアフリカ代表として出場できる。2006年の出場時にベスト8まで勝ち上がった実績をもつアル＝アハリーにとって、前回の雪辱を晴らしたいところである。こうなるとエジプト中のアル＝アハリーのファンは俄然やる気になるわけだ。もう待ちきれないといった感じに、決勝の第1戦（11月2日）の日が近づいてつれてカイロの街中では赤色の旗がはためき、ユニフォームを着る人が増えていった。新聞紙上は決勝の話題で持ちきり、人び



写真2 街中ではためくアル＝アハリーの旗
決勝戦直前には街中で数多くこのような光景を目
にすることとなった。

とはそわそわする毎日を過ごしていた。

そして運命の11月2日。アフリカ・チャンピオンズリーグの決勝第1戦。相手はカメルーンのコトンスポール・ガルア。近くにあるマクハーでテレビ観戦することに決めていた自分は、試合開始30分前ぐらいにマクハーに赴いた。するとすでに店のなかは人で溢れかえっている。店内だけでなく、路上にも椅子が大量に並べられていたが、そのほとんどが埋まっている状況。路上の後方にある席を陣取ると、シャーイ（紅茶）を頼んで試合開始の時間を待つことにした。ただ、もうこの時から観戦客の熱気が凄い。店主が観戦客を煽り立て、観戦客もその煽りに大声で応えていく。さすがに半袖では寒くなってきた11月のカイロだが、彼らはそのようなことなどまったく気にしない。マクハーでさえこのような状況だから、カイロ・スタジアムの方は推して知るべし、といったところか。約74,000人を収容できるあのとてつもなくでかいスタジアムが全て埋まるのだから、エ



写真3 試合開始前のマクハー
マクハーの中も外も人で溢れかえっていた。

ジプトのサッカー熱の凄さには改めて脱帽する。実際、テレビに映し出されているスタジアムはどこを見渡しても赤、赤、赤。このようななかで試合を行なわなければならないカメルーンのコトンスポール・ガルアに逆に同情を禁じ得ないのだった。

スタジアムと同様に騒ぎ立てていたマクハーの観戦客たちだが、試合開始の笛がなったら途端にテレビ画面に釘付けになって、微動だにしなくなった。固唾をのんで成り行きを見守るとはこのことをいうのか、というぐらいみんな画面から目を離さない。だが試合開始4分、アル＝アハリーが先制点をあげると、それまでの静まりかえった雰囲気が一転、マクハーは一気に熱気に包まれた。観客は総立ちになって喜びを爆発させ、叫ぶ。自分も思わず立ち上がり、隣の親父とハイタッチを交わして喜びを分かち合った。そこには普段の生活のなかにある違いなんて何もない、「アル＝アハリー」という共同体が確かにあった。

その後も攻め続けるアル＝アハリーの試合



写真4 試合観戦中のマクハー
店先にはアル＝アハリーの旗がはためいている。

展開に、マクハーは「押せ！押せ！」の声援。その間にも、道行く人や自動車がマクハーの前で止まり、「今どうなっている？」と試合経過を気にかける。そうしたなか、前半15分に鮮やかなゴールで追加点をあげると、マクハーの熱気は最高潮に達した。若者から爺さんまで年齢を問わずにみんな総立ち、喜びを爆発させて叫んだ。

熱気に包まれていたマクハーだが、その後試合の方は膠着して動かなくなってしまった。動きのない試合に応援し疲れたマクハーの観戦客たちは、シャーイを飲みシーシャ（水たばこ）を吸いながらその成り行きを見守る。試合は結局その後大きな動きもなく、2-0のままアル＝アハリーの勝利に終わっ

た。見どころは前半の数十分だけであったが、人びとはそれでも満足そうに勝利を噛み締め、各自家路に着くのだった。自分も帰路に着くのだったが、エジプト・サッカーの深さを目の当たりにし、興奮してその夜は寝付けなかった。

決勝の第2戦は2-2で引き分け、アル＝アハリーは見事アフリカ・チャンピオンズリーグの優勝をもぎ取った。そして12月のクラブワールドカップ本戦。数多くのエジプト人たちが決して安くはない旅費をはたいて日本までやってきた。こうしてアル＝アハリーはまたひとつの歴史を刻み、エジプトの人びとに夢と希望という名の記憶を刻み込んだのかもしれない。こういう姿を見るにつれ、アル＝アハリーとザマーレクが、そしてエジプトのサッカーが、エジプト人とは切っても切れない関係にあることを痛感させられる。

だからエジプト社会を知りたい人には、自分とはぶんこういう助言をするだろう。

「エジプト社会を知りたいのであれば、アハラーウィーかザマルカーウィーになろう」と。